宝治元年『院御歌合』注釈―「山花」題―

位藤　邦生・藤川　功和

【キーワード】為家・後嵯峨院

はじめに

前号に引き続き、宝治元年（一二四七）『院御歌合』の注釈を試みる。今回は「山花」題十三番を取り上げる。注釈は、広島大学中世文芸研究会における輪読をもとに、位藤邦生と藤川功和が再検討したものである。輪読時の各番担当者と所属を以下に示す。

十四番―土井昌子（文学部研究生）、十五番―鎮西美佳（文学研究科博士課程前期）、十六番―位藤邦生、十七番―山崎真克（松江工業高等専門学校）、十八番―藤川功和、十九番―濵口好太郎（文学研究科博士課程前期）、二十番―岡田潤（同研究生）、二十一番―金岡文緒（課目等履修生）、二十二番―豊田宮子（文学研究科研究生）、二十三番―吉川洋子（文学部四年生）、二十四番―中村朋子（同）、二十五番―冨永洋介（同）、二十六番―小林文子（同）

凡例

一、底本は、群書類従本（巻第二百所収）を用いた。

一、校合した諸本と略号は、以下の通り。

（書）―書陵部蔵本〔五〇一・七四〕（『新編国歌大観』の底本）

（聚）―書陵部蔵歌合類聚本（『大日本史料』第五編之二十四所収）

（永）―永青文庫蔵本〔一〇七・三六・七〕（『細川家永青文庫叢刊』第八巻所収）

（内）―内閣文庫蔵本「百三十番歌合（外題）」〔二〇一・二四七〕

（支）―九州大学支子文庫蔵本〔九一一・ホ・一〕

一、注釈は、番全体の本文【校異】を示した後、【他書所伝】【本歌】【語釈】【通釈】をあげた。

一、【語釈】の内、各詠作者並びに前号既出の語彙については、紙幅の関係上これを略した。

一、表記や送り仮名の異同はこれを略し、見せけちや補入符号によって訂正のある箇所は、訂正後の本文を採用した。

一、翻字本文には、適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。
一、本文中、異同の存する箇所には、傍線及びイ、ロ、の如く付し、語釈を施した箇所には、本文右傍に①、②、の如く通し番号を付した。
一、底本で文意不通等が認められる場合、他本の本文に拠り通釈を施した。その際、本文【校異】【通釈】において他本に拠った箇所に▒網掛けを施した。
一、当該歌合以外の和歌の引用は、原則として『新編国歌大観』に拠り、その他の引用文献は、適宜底本を示した。
一、引用本文には、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

〈十四番〉

十四番　山花①　　女房
左（イ勝）　　小宰相
右
ロ みても猶おくそ床しきあし垣②の吉野の山のはなの盛は
ハ 雲③の上の山ニも木高き桜花④御代⑤のさかりの春にあふらしホ
左歌ヘおくそゆかしきあしかきのと侍るほと、梅⑥の
立枝にみふるしたるものに侍るト、よしのの花チ
にてあらぬ、ことにリ凡俗の思ひヌよるへきさまに
も侍らす、花実⑦あひかぬるとはワこれらにこそ侍るら
めと有かたくこそみえ侍れ、右山も木高きさく
ら花、うちまかせたる哥⑧カにならひ侍らましかは、たけ
あるさまにヨみえ侍りなまし、猶左タかち侍るへし、

【校異】
イ 勝ーナシ（書）　**ロ** ナシー続後撰、春中（聚）、後後撰（永）
ハ 雲の上の山も木高き桜花御代のさかりの春にあふらしーナシ（支）　**ニ** の－に（聚）、に（内）　**ホ** しーん（書）　**ヘ** 歌ーナシ（支）　**ト** るーるを（書）（聚）（永）（内）（支）　**チ** 花ー山（花イ）（永）
リ ことにーことにめつらしくまことに（書）、事にてめつらしくまことに（永）　**ヌ** 思ひーおよひ（書）　**ル** 侍ーあ（書）　**ヲ** ぬるとはーぬなとは（書）（内）、ぬるなとは（永）　**ワ** らーナシ（支）
カ にーナシ（永）　**ヨ** にーには（書）（永）　**タ** 左ー左尤（書）（永）

【他書所伝】
〈左歌〉
『続後撰和歌集』巻第二・春歌中・七八
十首歌合に、山花　　太上天皇
見ても猶おくぞゆかしきあしがきのよしのの山の花のさかりは
『新三十六人撰』・三三
太上天皇御製後嵯峨院
見ても猶おくぞゆかしき蘆垣のよし野のやまのはなのさかりは
『歌枕名寄』巻第七・吉野篇・二〇三九

同（後続二）　後嵯峨院

見ても猶おくぞゆかしきあしがきのよしのの山の花のさかりは

〈右歌〉　ナシ

【語釈】

①**山花**―山中に咲く花を意味する漢語。我が国においては『菅家文草』等に詩句として用例がみえる他、歌題としても多く確認でき、「（山花留人といへることをよめる）をののえはこのもとにてやくちなましはるをかぎらぬさくらなりせば」（『金葉和歌集』二度本・巻第一・春部・四八・大中臣公長）等結題の詠や、「（宰相入道教長家歌合、山花）よしさらばしるべにもせんけふばかり花もてむかへ春の山かぜ」（『林葉和歌集』第一・春歌・一五五）等二字題の例もみえる。

②**あし垣の**―「あし垣」は葦を縫い合わせて作った垣根。垣の目が密であることから「人しれぬ思ひやなぞとあしかきのまぢかけれどもあふよしのなき」（『古今和歌集』巻第十一・恋歌一・五〇六）の如く、「間近」又は「間」等に掛かる枕詞として用いられ、また、前掲古今集歌では「あし」と「よし」が響き合うように用いられている。当該歌では、後の例であるが「たちかくす霞やなぞとあしがきのよしののはなをみるよしもがな」（『隣女集』巻第二・春・三一五）等と同様、「吉野の」「はな」に掛かり、桜が間近に咲き誇る吉野山の春景を表現する。

③**雲の上の山**―「白雲のうへより見ゆる足引の山のたかねやみさかなるらん」（『能因法師集』中・八九）の如く、雲よりも高く聳える山の意。「雲の上」に「久方の雲のうへにて見る菊はあまつほしとぞあやまたれける」（『古今和歌集』巻第五・秋歌下・二六九・藤原敏行）、「（祝言）雲のうへも春のみ山の万代も松と竹とのすゑにたとへて」（『正治後度百首』二九六・藤原雅経）等の如く、宮中の意を響かせる。

④**木高き桜花**―「木高き」は、「ふたばよりたのもしきかなかすが山こだかき松のたねぞとおもへば」（『拾遺和歌集』巻第五・賀・二六七・大中臣能宣）の如く繁栄を暗示する。また、「桜花」は、後嵯峨院が「いろいろに枝をつらねてさきにけりはなもわがよもいまさかりかも」（『続古今和歌集』巻第廿・賀歌・一八六四）と詠じた如く、詠者やそれに連なる者の繁栄の象徴として機能する。なお、『宝治百首』には、「またれつるこだかき山の桜花末たのもしくさきにけらしな」（春廿首・初花・四九八・藤原定嗣）という類例がみえる。

⑤**御代のさかりの春**―前年、久仁親王（後深草天皇）に譲位し、院政を開始したばかりの後嵯峨院の御代を春闌という状況に引きつけて言祝ぐ。「吹く風ものどけき御代の春にてぞさきける花のさかりをもしる」（『正治初度百首』下・春・一九一七・讃岐）はその類例。

⑥**梅の立枝にみふるしたるものに侍る**―清輔詠「あしがきのおくゆかしくもみゆるかな誰がすむ宿の梅の立えぞ」を指す。勅撰集入集歌でもない歌を院が詠作に利用していることを指摘し、判者として

院の作為を汲み取っていることと院への賞賛を同時に込める。なお、当該清輔詠は、『太皇太后宮大進清輔朝臣家歌合』、『治承三十六人歌合』、『玄玉和歌集』、『中古六歌仙』、『雲葉和歌集』、『歌仙落書』にみえる。

⑦**花実あひかぬる**－詞を花、心を実に喩え、あるべき和歌の理想を説く所謂花実論に基づく表現。花と実のどちらを重視するかは、時代や論者によって異なる。定家作と伝えられる『毎月抄』は、「心と詞とを兼ねたらむをよき歌と申すべし」とする。

⑧**うちまかせたる哥**－ありふれた歌、並一通りの歌。そういった普通の歌と並んでいるなら、右歌も格調のある歌にみえると一定の評価を与える。

【通釈】

十四番　山の花

左（歌）勝　　女房（後嵯峨院）

（実際に）目の当たりにしてもさらに（吉野山の）奥（の桜）が見たい。葦垣のように間近に（咲き誇る）吉野山の花盛りには。

右（歌）　　（承明門院）小宰相

（眼前に）雲の上まで高く聳える山（のその）一段高くに咲く桜の花（がみえる）。（あたかも院の）御代の絶頂の春を目の当たりにしているかのようであるよ。

〔判詞〕左歌（の）「おくそゆかしきあしかきの」とありますあたりは、「梅の立枝」（と詠み込んだ清輔詠）に見慣れた表現でございまして、「よしのの花」と（表現し）てあらぬ様（に仕立てられているのは）、特に世間並みの者が考えつく表現でもございません。詞と心が両方備わっている（歌）とはまさにこれらのことでございますと有り難くみえます。右（歌の）「山も木高きさくら花」（という表現は）、並一通りの歌と並びましたなら、格調のあるようにみえますでしょう。やはり左（歌）が勝ちでございます。

四

〈十五番〉

十五番

左　　太政大臣

思ひ出よ我もむかしは立田山①たかねの花も袖にかけてき

右（イ勝）　　俊成卿女

ロ春は又花③の都と成にけり桜④に匂ふみよしの丶やま

左我もむかしは立田山、さためてゆへ⑤ハなからす侍らんニと

みえ侍ホり、右桜に匂ふみよしの丶山、花の都に

心もなりかへ⑥ヘりてトうつり侍りぬるにこそ、

【校異】

イ　勝－ナシ（書）　**ロ**　ナシ－続拾遺、春下、（聚）　**ハ**　なから　す－ふかく（書）（永）（内）、なくは（聚）、なかく（支）　**ニ**　ん　－し（聚）　**ホ**　侍り－侍るに（書）　**ヘ**　り－く（支）　**ト**　て－ナシ（聚）

【他書所伝】

〈左歌〉

『夫木和歌抄』巻第四・春部四・一二四〇

宝治元年十首歌合　常磐井入道太政大臣

おもひ出でよ我もむかしは立田山たかねの花も袖にかけてき

〈右歌〉

『俊成卿女集』二〇九

宝治元年十月歌合に、山花

春はまた花の都と成りにけり桜ににほふみよしのの山

『歌枕名寄』巻第七・吉野篇・二〇四四

続拾二　俊成女

春はまた花のみやこと成りにけりさくらににほふみよしのの山

【参考歌】

〈左歌〉

『古今和歌集』巻第十七・雑歌上・八八九

（題しらず）　（よみ人しらず）

今こそあれ我も昔はをとこ山さかゆく時も有りこしものを

【語釈】

①立田山―立田は大和国の歌枕で紅葉の名所として古来多くの歌作がなされた。また、当該歌の如く春の景を詠み込んだ作も散見する。「たつたやまみつつこえこしさくらばなちりかすぎなむわがかへるとに」（『万葉集』巻第二十・四四一九・大伴家持）、「しら雲の春はかさねて立田山をぐらのみねに花にほふらし」（『新古今和歌集』巻第一・春歌上・九一・藤原定家）等はその例。

②たかねの花―本来「このもとにすみけるあとをみつるかななちのたかねの花を尋ねて」（『山家集』中・雑・八五二）の如く、高い山に咲く桜を意味する。一方、慈円は「（心足即為富、身閑仍当貴、富貴在此中、何必居高位）谷かげや心のにほひ袖にみちぬたかねの花の色もよしなし」（『拾玉集』第二・詠百首和歌（文集百首）・閑居十首・一九八〇）と、『白氏文集』の詩句「居高位」を「たかねの花」と換言している（実氏は前年太政大臣を辞している）。また、下の句の「袖にかけてき」には、「すべらぎのかざしに折ると藤の花およばぬ枝に袖かけてけり」（『源氏物語』宿木巻・薫）の如く、「女性を我がものにする」という意もあり、恋の趣を含んだ詠とも解し得る。詠者が意図的に真意を朧化させ一首に仕立てたものか。

③花の都―吉野には古代離宮が営まれており、それに因んだ「さとの名はよしのの山とあれにしを花ぞ都のかたみなりける」（『俊成卿女集』詠百首和歌・花・八七）等の詠がみえる。当該歌では、「このへの人さへ春はうつりきぬよしのの山は花のみやこか」（『拾玉集』第一・一日百首・花・九〇四）の如く、辺り一面に桜が咲き誇る春景から、古宮のあった地を華やかな都に喩える。

④桜に匂ふ―「風にしも何かまかせんさくら花匂あかぬにちるはうかりき」（『後撰和歌集』巻第三・春下・一〇六・藤原敦忠）の如く、桜の色が美しく映える意。「桜に匂ふ」例歌としては、「かざしをる

道行人のたもとまで桜に匂ふきさらぎの空」（『拾遺愚草』中・詠花鳥和歌・一九八五）がみえる。

⑤さためてゆへなからす―実氏が自詠に込めた比喩の真意を、為家が図りかねた故の評と思われる。

⑥心もなりかへりてうつり侍りぬる―「なりかへる」はその状態に成りきる意。「つき草のうつし心やいかならんむらむらしくもなりかへるかな」（『馬内侍集』九五）、「我がやどもあられふりしくときはみな玉のうてなになりかへるめり」（『相模集』三七〇）等がその例。「心」は「うつり侍り」にも掛かり、右歌の勝を暗に示す。

【通釈】

十五番

左（歌）　太政大臣（西園寺実氏）

思い出してもみよ、私も昔は立田山（の高嶺）に立ち、そして高嶺の花を我が袖にかけたこともあったことだよ（それが今はまあ…）

右（歌）勝　俊成卿女

春になると再び花の都となることだなあ。桜で美しく映える吉野山は。

〔判詞〕左（歌の）「我もむかしは立田山」（という表現は）、きっと何か理由がなくはないと理解されます。右（歌が）「桜に匂ふみよしの丶山」（と詠み、花の都に戻って私の）心もすっかり（「花の都」詠に）変わって（右歌に）惹かれました。

〈十六番〉

十六番

左（イ持）　権大納言通忠

みよしの丶たかきの山の桜花①雲②より空に匂ふ色かな

右　権大納言実雄

山③（ロ）かせは心してふけ高④砂の尾上の桜⑤いまさかり也

左高木（ハ）の山（ニ）のさくら花、哥（ホ）たけもみえ侍るを、

雲より空（ヘ）こそいまた（ト）みをよはぬ事にて侍りけれ、

⑥雲より（チ）猶うへさまにほへる色にて侍らめとも、あまりにあたらしくや侍らん（ル）、右姿詞よろしく侍り（リ）（ヌ）、

かやうの事おもかけあるやうにて覚つかなく侍れ（ヲ）は、

⑦左上下句（ワ）終の字おなしく侍るも、なきにはおとりて侍れは、持（カ）と申（ヨ）へきにや、

【校異】

イ 持―ナシ（書）　**ロ** ナシ―新後撰（永）　**ハ** 左―ナシ（聚）（永）（支）　**ニ** の―ナシ（書）　**ホ** 哥―うたの（書）（永）　**ヘ** 空―空に（聚）　**ト** いまた―ナシ（支）　**チ** より―よりも（書）（永）　**リ** よろしく―よろしくは（永）　**ヌ** 侍り―侍るか（書）（永）（支）（内）、侍る（聚）　**ル** おもかけあるやうにて―みしおもかけはへるやうにて（書）（永）　**ヲ** 侍れは―侍に（書）（永）　**ワ** 句―の句（永）　**カ** 持―勝（支）　**ヨ** 申へき―可申（内）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『新後撰和歌集』巻第二・春歌下・七九

（宝治元年、十首歌合に、山花）　山階入道左大臣

山風は心してふけ高砂のをのへのさくらいまさかりなり

『歌枕名寄』巻第三十一・雑篇・八一二八

同一（新後）　山階入道左大臣

山風はこころしてふけたかさごのをのへのさくらいまさかりなり

【語釈】

①**みよしのゝたかきの山の桜花**―高城山は、大和国吉野山系の一つ。なお、『教長集』に「みよしののたかぎのやまのさくらばなならぶにほひはまたなかりけり」（九七）と、当該歌と上の句が完全に一致する先行例がみえる。

②**雲より空に**―『千五百番歌合』に「しら雲のかかるたかねをはじめにて空よりにほふ山ざくらかな」（春三・百六十三番左・三二五・藤原良平）と類例がみえる。また、当該歌合とほぼ同時代の例として、『宝治百首』の「春もいま花もさくらの時ぞとや雲よりにほふかづらきの山」（初花・五一六・俊成卿女《『新続古今和歌集』一二四》）があげられる。通忠は良平詠から「雲より空に匂ふ」という表現を案出したか。

③**山かせは心してふけ**―桜の花が散るのを惜しんで山風に「心してふけ」と呼びかける趣向の先行例としては、「けふくれぬあすもきてみむさくらばなこころしてふけはるの山かぜ」（『金葉和歌集』二度本・巻第一・春部・四四・源師俊）が早い例。

④**高砂の尾上の桜**―「高砂」は、播磨国の歌枕で加古川河口付近の地名。「たかさごのをのへのさくらさきにけりと山のかすみたたずもあらなん」（『後拾遺和歌集』巻第一・春上・一二〇・大江匡房）等の先行例がみえる。

⑤**いまさかり也**―「さくらばないまさかりなりなにはのうみおしてるみやにきこしめすなへ」（『万葉集』・巻第二十・四三八五・大伴家持）他、先行例多数。なお、「あまつかぜよきてふかなんうちひさすみやぢのさくら今さかりなり」（『万代和歌集』巻第二・春歌下・二四〇・藤原定家）は発想において当該歌と似通う。

⑥**雲より猶うへさまににほへる色にて侍らめとも**―左歌下の句「雲より空に匂ふ色かな」に対する為家の理解。「雲より空に」は【語釈】②に示した如く、先行例の乏しいこなれない表現であり、作者の意図を汲み取りつつも表現にやや無理があると指摘する。

⑦**左上下句終の字おなしく侍るも、なきにはおとりて侍れは**―早くは『歌経標式』に指摘がみえる。また、『俊頼髄脳』は、「あしひきのやまがくれなるさくらばなちりのこれりと風にしらすな」（『天徳四年内裏歌合』七番左・一四・少弐命婦）を例示し、「桜ばなといへるなの字と、散り残れりと風に知らすなといへる、はてのな文字となり。（中略）これをば悪しともさだめられず。かやうの程のこ

とは、歌によるなめり」と指摘する。

【通釈】

十六番

左（歌）　持　　権大納言（藤原）通忠

み吉野の高城の山の桜花は（花の盛りになって）、雲から空にかけてひとつづきに美しく咲き匂っていることだよ。

右（歌）　　権大納言（藤原）実雄

山風は心して吹け。高砂の尾上（峰）の桜はいま盛りであるぞ。

〔判詞〕左（歌の）「たかきの山の桜花」（という表現は）、歌の格調も（よく）見えますが、「雲より空」（という表現）はこれまで見たことのないものでございます。（意味するところは）雲よりもなお上方に（美しく）照り映える色でございましょうけれど、あまりにも新奇（な表現）でございましょう。右（歌の）姿・詞（の両方）がまあよろしゅうございます。（しかし）このようなこと（＝着想）は以前に見た表現のようで（新しさという点では）おぼつかのうございまして、（一方）左（歌の）上句と下句の終わりの字（「さくらばな」と「色かな」）が同じでございますのも、そうした欠点がないのよりは劣っておりますので、（この番は）「持」と申すべきでしょう。

〈十七番〉

十七番

左　　権大納言定雅

桜花遠の里まてなかむ覧あたにおらすな春の山守

右（イ勝）　　権大納言公相（ロ）（ハ）

葛城やいつくを花と尋まし梢につゝくみねの白雲

左おもひやりふかくは侍れと、花の遠のさとまて

なかめやりたるさまにや聞なされ侍らん、あた

におらすな春のやまもりと侍るも、上陽春管

領の花処々さためて侍らめとも、いかにそや聞え

侍るにや、右かつらきの雲梢につゝきて花ひと

つなるおもかけたちて侍れは、右勝侍るへし、

【校異】

イ　勝ーナシ（書）　**ロ**　権大納言ーナシ（永）　**ハ**　公相ー公経（聚）、公相（きむすけ古本）（永）　**ニ**　いつくーいつこ（書）　**ホ**　侍れと—みえ侍れと（書）（永）　**ヘ**　なかめやりたるーなかめたる（書）（聚）（永）（内）（支）　**ト**　やまもりー山もと（支）　**チ**　春ーナシ（書）　**リ**　花処々さためてー花処々にさためて（書）、節處（花ところ）にや（さためイ）（永）　**ヌ**　侍らめとも—侍られとも（内）　**ル**　つゝきてーつきて（内）、つきては（支）　**ヲ**　花ー花も（書）、花の（聚）、花（花も）（永）（ヒ）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ　〈右歌〉ナシ

【語釈】

①**遠の里まてなかむ覧**―遠くの里人までもが桜花を眺めているだろうの意。「ここに又わがあかぬ月を山のはのをちのさとにはおそしとやまつ」（『古今和歌六帖』第一・一七四）の如く、視点人物が遠くの里人の様子を思いやっている状況を表す。

②**あたにおらすな春の山守**―番人である山守に対して、桜を折らせないように求める趣向。桜を折り取る者を咎める存在としての山守は、既に『後撰和歌集』「山守はいはばいはなん高砂のをのへの桜折りてかざさむ」（巻第二・春中・五〇・素性）等にみえる。

③**葛城**―大和国の歌枕。現在の奈良県西部、大阪府との境に位置する山系。平安後期には「葛城の高間の山」の桜の美しさを詠む例が多くみえる。

④**梢につゝくみねの白雲**―「吉野やま嶺の桜のさかりこそ雲路につづくながめなりけれ」（『正治初度百首』春・一五一七・藤原範光）の如く、白い花の咲く梢と峰の白雲とが連続するように見え、見分けがつきがたい状況を詠む。なお、公相には、「あしびきの山のたかねを見わたせばくもねにつづくはなざくらかな」（『万代和歌集』巻第二・春歌下・二四三）という詠もみえる。

⑤**おもひやりふかく**―遠くの里の様子を思いやる内容は心も深くみえますの意。『千五百番歌合』の宮内卿詠「とやままでみ山のあられわけすぎてまさきのかづら秋かぜぞふく」（秋四・七百七十二番左・一五四二）に対する定家判「はるかにおもひやられてをかしくは侍るを」はその一例。

⑥**聞なされ侍らん**―出詠歌が作者の意図と異なる文脈で判者に理解されることを示す。為家は、上句の表現では桜花が遠くの里まで眺めやっているように理解されてしまうと指摘する。

⑦**上陽春管領の花処々さためて侍らめとも**―『和漢朗詠集』上・春興・二〇「歌酒家家花処処　莫空管領上陽春」（出典は『白氏文集』巻第五十六「送二東都留守令狐尚書赴一任」）という詩句を判者為家が想起し、当該歌の趣向と共通点を持つ先例であることを認めた発言。為家の認識した共通点ははっきりしないが、「花処々」に焦点をあてた引用の文言から考えると、花が盛りに咲いている情景を詠んだ点を指すか。あるいは、下句を批評対象とする判詞の構成から考えると、むなしく上陽の春を過ごすなという詩句と、むなしく桜を折らすなという歌との表現の類似を指すか。なお、為家には「花処々」を題とした「身を分けてゆかまほしきは山ざくら花のさかりのよもの木のもと」（『為家集』上・春・一九五）がある。

⑧**おもかけたちて**―先行する歌の表現が想起される場合にも用いられるが、ここでは歌に詠まれた情景が視覚的映像として眼前に浮かぶ様を示す。『後京極殿御自歌合』十三番右・二六「はれ曇り嶺しづまらぬ白雲は風にあまぎる桜なりけり」について、俊成は、「見るやうには面影おぼえ侍れど」と判を付している。

【通釈】

十七番

左（歌）　　権大納言（藤原）定雅

遠くの里人までもが桜花を眺めていることだろう。むなしく桜を折らせるなよ、春の山守よ。

右（歌）勝　　権大納言（西園寺）公相

葛城の（山の）いったいどこを花だと思って探し求めたらよいのであろう。花の咲く梢へ続くように峰には白雲がかかっており、見分けがつきがたいことよ。

〔判詞〕左（歌の）（遠くの里の様子を）思いやる内容は（心も）深くみえますが、（これでは）桜花が遠くの里まで眺めやっているように理解されてしまうでしょう。（下句の）「あたにおらすな春の山守」とありますのも、上陽の春を過ごし花は至るところに咲いている（という詩句は『和漢朗詠集』に）確かにございますが、どうであろうと思われるでしょう。右（歌は）葛城にかかる雲が梢へ続いて雲と花とが一体になるように見える情景が目に浮かびますので、右（歌）が勝でしょう。

〈十八番〉

十八番

左（イ持）　　権大納言公基

よしの山峯にたな引（ロ）白雲①のにほふは花の盛なりけり

右　　為教朝臣

今朝（ハ）よりは雲こそ匂へ吉野山高根②の桜今（ニ）や咲らん（ホ）

左右共に白雲の（ヘ）匂ふによりて花を分るよし

の山、高下③をさため申（ト）侍らん、中（チ）〳〵に侍れは、可為持（リ）、

【校異】

イ　持－ナシ（書）　ロ　ナシ－新後撰、春下（聚）、新後撰（永）　ハ　今朝－けふ（書）　ニ　今－花（書）（永）　ホ　らん－らし（書）（永）　ヘ　の－ナシ（書）　ト　申－ナシ（支）　チ　ナシ－は（支）　リ　可為持－持たるへし（永）

【他書所伝】

〈左歌〉

『新後撰和歌集』巻第二・春歌下・七八

宝治元年、十首歌合に、山花　　万里小路右大臣

よし野山みねにたなびくしら雲のにほふは花のさかりなりけり

〈右歌〉

『蓮性陳状』（本文は、歌合類聚本《「大日本史料」所収》）

今朝よりは雲こそにほへ芳野山たかねの桜今やさくらん

【語釈】

①**白雲のにほふ**―「よしの山花の盛やけふならむそらさへ匂ふみねのしら雲」（『御室五十首』二五七・藤原俊成）、「またれつる花のさかりか吉野山かすみのまよりにほふ白雲」（『式子内親王集』一〇九）の如く、白雲が桜の盛りによって一層白く照り映える様を詠む。

②**高根の桜**―ここでは吉野山の高嶺の桜を指す。「しらくもとをちのたかねに見えつるはこころまどはすさくらなりけり」（『金葉和歌集』二度本・巻第一・春部・三六・藤原公実）等がその例。

③**高下**―左右が吉野山を詠んでいることに因んで歌の優劣を換言した表現。例えば、『春日若宮社歌合』祝・三十五番「あめのしたをさまれる代と三笠山嶺の朝日のかげぞのどけき」（藤原経定）「万代とさしてもいはじちはやぶる三笠の山の神にまかせて」（鷹司院帥）の優劣について、判者知家は、「此つがひ、おなじみかさ山、高下あるべからずや」と記す。

【通釈】

十八番

左（歌）持　　権大納言（藤原）公基

吉野山の峯に棚引いている白雲が色映えて見えるのは（今気付いたのだが峯の辺りの）桜が盛りだからだったのだなあ。

右（歌）　　（藤原）為教朝臣

今朝からは（峯の辺りの白）雲がまさに色映えてみえる。吉野山の高嶺の桜は今まさに咲いているのであろう。

〔判詞〕左右（の歌が）共に（詠み込んでいるのは）白雲が色映えることによって花（が咲いているのをそれと）判別した吉野山（の詠であり）、（歌の出来映えの）高い低いを決め申し上げますのは、なかなか難しゅうございますので、持とする。

〈十九番〉

十九番

左　　中納言為経

白波の立重なれる瀧の上のイ①み舟の山は花さかりかも

右ロ勝　　信実朝臣

けふしはや花待つくる老らくのみ②山かくれに春を知らんハ

左歌白③波のなとこと〳〵しきすかたにおもひ

よりて侍り、み舟の山といへるまてさしてその

難なくみえ侍るを、右歌述懐には侍れと、心詞

④いひしりてすかたおかしく、かやうのましらひにも

花待つくる心ちし侍らんニ、⑤さて、花ホの心みすてかたき

につきヘて、いはれなく勝トの字をつけチリぬ

【校異】

イ　の―に（書）（支）　**ロ**　勝―ナシ（書）　**ハ**　らん―かな（書）（永）　**ニ**　らん、さて―らむまて（書）（永）　**ホ**　花―老（書）（永）　**ヘ**　き―きけ（永）　**ト**　の―ナシ（書）　**チ**　つけ―つき（聚）（内）（支）

リ　ぬ―侍りぬ（書）（永）

【他書所伝】

〈左歌〉

『夫木和歌抄』巻第四・春部四・一二四一

同（宝治元年十首歌合）　大宰権帥為経卿

しら浪の立ちかさなれる滝の上のみふねの山は花盛かも

〈右歌〉ナシ

【語釈】

①瀧の上のみ舟の山―「瀧」は、宮の瀧（宮滝）を指す。大和国の歌枕。「み舟の山」（御船の山）は、同じく大和国の歌枕で、吉野川をはさんで宮滝の東南に位置する。宮瀧と三船山は併せて詠み込まれることが多く、『万葉集』の「たきのうへのみふねのやまにゐるくものつねにあらむとわがおもはなくに」（巻第三・雑歌・二四三・弓削皇子）、「たきのうへのみふねのやまはかしこけどおもひわするるときもひもなし」（巻第六・雑歌・九一九・車持千年）等が早い例。

②み山かくれ―山の奥深くに隠れている意。「わがこひはみ山がくれの草なれやしげさまされどしる人のなき」（『古今和歌集』巻第十二・恋歌二・五六〇・小野美材）、「老いはててみやまがくれにすむまでもわかのこころのうせぬかなしさ」（『教長集』九六五・静蓮）等、人知れない恋や隠棲者の比喩としての用例がみえる。

③白波のなとことくしきすかた―「ことことし」は、仰々しい、大層である意。「両首共に事事しからんとは心ざしたれども不聞にや」（『六百番歌合』冬部・寒松・十番判詞）、「左ことことしくたかくよみなせる振舞、勝とみえ侍るにや」（建長八年『百首歌合』四十三番）等、プラス評価としての例がみえる。当該歌以前では、「いせのうみのうらのはまゆふいくへともいさしらなみのたちかさねつつ」（『明日香井和歌集』上・百日歌合・七二五）が、「白波・立ち重」の先行例としてみえる。

④いひしりて―ものの言い方をよく心得ている意。「左はぬさはせんなどは、いひしられるにには侍れど」（『六百番歌合』恋部下・寄傀儡恋・七番判詞）等がその例。

⑤さて、花の心―書陵部本等は、「らむまて、老の心」とする。「さ」と「ま」、「花」と「老」は各々字体が似ており、また、「花」と「老」は、直前に「花の待つくる」とあり、目移りによる誤写が想定される。底本の「さて」では落ち着きの悪さもあるが、ここでは底本を尊重した。

【通釈】

十九番

左（歌）　中納言（藤原）為経

（流れが激しく）白波が立ち重なっている吉野川急流の上にそびえる三船の山は（これもまた白波が立ち重なっているかのような）桜の盛りであることよ。

右（歌）　勝　（藤原）信実朝臣

今日という今日は、花が咲くのを待っていた老身（のあの人）が（春の訪れが遅い）深山の隠居において春（が来たこと）を知るであろうよ。

〔判詞〕左歌（の）「白波の」など仰々しい情趣に思い至っております。「み舟の山」と表現しているところまでこれといってその難点はないように思われますのを、右歌（は）述懐（として老いを嘆いた歌）ではございますけれど、心詞は言い方をよく心得ていて情趣があり、この（右歌の）ような（世間との）付き合い方であっても花（が咲くの）を心待ちにする気がするでしょう。さて、（老身で花を待つ状況で）花（へ）の（執）心が見捨てがたいので、はっきりとした根拠もなく（右歌に）勝の字をつけてしまった。

〈二十番〉

二十番
左（イ持）　左（ロ①）衛門督通成
②わくかたもなくて詠めん桜花③たちなまかひそ山の端の雲
右　右近（ハ）中将雅光
桜花さくとみしより松④山の梢に波のかけぬまもなし（そイ）（きイ）
わくかたなくてなかめんといへる、あまりにたゝ⑤
事にてや（ホ）侍らん、さくら花さくとみしより（ヘ）又め⑥
つらしきやうにも（ト）侍らねは、おなし程のことにや（チ）
侍るへき（リ）

【校異】
イ　持―ナシ（書）　**ロ**　左―右（書）（永）　**ハ**　近―近衛（支）
ニ　かた―かたも（書）（聚）（永）（内）　**ホ**　にてや―にや（書）（永）
ヘ　より―よりも（書）（永）　**ト**　やう―さま（書）（永）　**チ**　も―は（書）（聚）（永）（内）（支）　**リ**　るへき―らん（支）

【他書所伝】
〈左歌〉
『現存和歌六帖』五七七
（さくら）　右衛門督通成
わくかたもなくてながめんさくらばなたちなまがひそやまのはのくも

〈右歌〉ナシ

【語釈】
①左衛門督通成―この時、通成は右衛門督。諸本により改める。
②わくかたもなくて―「めづらしきいもにあふよはほととぎすわくかたもなくまたれぬるかな」（『太皇太后宮小侍従集』夏・三二）、「待つほどはわくかたなきを時鳥たれ一こゑをききまがふらん」（『正治後度百首』郭公・七一九・賀茂季保）等の如く、心を他に散らすことなく専念する様をいう。
③たちなまかひそ―「よし野山はなとはたれかしらざらむたちなまがへそみねのしら雲」（『千五百番歌合』春三・百五十九番右・三二八・藤原兼宗）等の先行例がみえる。

④松山の梢に波のかけぬまもなし－「松山」は、陸奥国の歌枕「末の松山」を指すとも考えられる。「末の松山」の場合、『後撰和歌集』「松山につらきながらも浪こさむ事はさすがに悲しきものを」（巻第十一・恋三・七五五・藤原時平）、「あぢきなくなどか松山浪こさむ事をばさらに思ひはなるる」（同七五九・藤原時平）等の如く、「末の」は必ずしも詠み込まれないが、本歌である『古今和歌集』「君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山浪もこえなむ」（巻第二十・東歌・一〇九三）の表現「波」・「越す」を詠み込んでいる。「松山」の桜を波に喩える発想は、「はるくればさくらが枝に風ちりて花の浪こすすゑのまつ山」（『拾玉集』第一・一日百首・花・九〇八）、「春くればこずゑに花のなみこえてよしののおくもすゑの松山」（『千五百番歌合』春二・百二十六番右・二五二・寂蓮）等の先行する「末の松山」詠と共通するが、当該歌の場合、「越す」という表現がみえないことや、「松山」を「末の松山」と解する必然性が充分ではないことから、松の自生する山として解する。

⑤たゝ事－歌語らしくないことばを指す。「ただことば」に同じ。『実国家歌合』歳暮・六番右歌・七一・平親宗詠「あさましやこよみのおくを今日みれば一くだりにもなりにけるかな」に対する藤原清輔判「むげにただ事どもなり」はその一例。

⑥めつらしきやうにも侍らねは－「桜が咲いたのをみて以来」という詠みぶりに新味がないことを指摘する。「桜花さくとみし」に限っても、「桜花さくとみしまにたかさごの松をのこしてかかるしら雲」（『続拾遺和歌集』巻第一・春歌上・五九・順徳院）、「春ふかみあらしの山の桜ばなさくと見し間に散りにけるかな」（『金槐和歌集』春部・九一）等の例がみえる。

【通釈】

二十番　　十四

左（歌）　持　　右衛門督（源）通成

心をわけることなく専念して眺めよう桜花よ。立ち昇って桜花と混じり合うな、山の端の雲よ。

右（歌）　　右近中将（源）雅光

桜花が咲いたと見たときから松山の梢に白波が絶えずうちかかっているようにみえることだ。

〔判詞〕（左歌の上の句に）「わくかたもなくて詠めん」と（詠んで）いる（が）、（これは）あまりに日常的な歌語らしくない表現でございましょう。（右歌の上二句の）「桜花さくとみしより」（も）また新鮮さを感じさせる詠みぶりでもございませんので、（どちらも）同じ程度の歌でございましょう。

〈二十一番〉

廿一番

左　兵部卿有教

①尋いる②花より花に日数へて③山ちのすゑに幾夜とまりぬ

右（イ勝）　弁内侍

心のみ行帰りつゝ山高み④おられぬ花そ（ロ）うつろひぬへき

花より花に（ハ）日数へて（ニ）、すかた詞こひねかふへきやうには（ホ）

侍らぬうへに、山路のすゑも覚束なくこそ侍れ、

こゝろの（ヘ）行てといへる、おかしくとりなされて⑤

侍れは、おられぬ花に心うつろひ侍りぬ、又以（ト）右（チ）為勝、

【校異】

イ　勝―ナシ（書）（内）　**ロ**　そ―に（聚）　**ハ**　に―の（書）（永）　**ニ**　へて―ナシ（書）（永）（支）、へ（内）　**ホ**　やうには―さまには（書）、さまには（イ無）（永）　**ヘ**　こゝろの―こころのみ（聚）　**ト**　又―ナシ（書）（永）　**チ**　右―ナシ（内）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ〈右歌〉ナシ

【本歌】

〈右歌〉

『古今和歌集』巻第七・賀歌・三五八・凡河内躬恒

（内侍のかみの右大将ふぢはらの朝臣の四十賀しける時に、四季のゑかけるうしろの屏風にかきたりけるうた）

山たかみくもゐに見ゆるさくら花心の行きてをらぬ日ぞなき

【語釈】

①尋いる―深く分け入る意。「（深山尋花）はるふかくたづねいるかなたにがくれかぜにしられぬはなやにほふと」（『教長集』一三二）の如く、花を尋ねて山深く分け入る詠での用例がみえる。

②花より花に―「やまふかみ花よりはなにうつりきてくものあなたのくもを見るかな」（『秋篠月清集』西洞隠士百首・春廿首・六一一）等と同様、詠者主体が山中で花を次々と尋ねる様。

③山ちのすゑ―「浦ちかき山ぢのすゑに日は暮れてふもとのいほにあまのもしほ火」（『寂蓮法師集』二四七）等の如く、山から出ていく路の終端を指す場合と、「たれかまたやまぢのすゑにむすぶらんちとせをながすきくのした水」（『千五百番歌合』秋四・七百七十九番左・一五五六・源具親）、「見てもなほ花に心のゆきやらで山路のすゑにけふもくらしつ」（『東撰和歌六帖』第一・春・桜・一七四・光西法師）と、山奥の山路の果てを指す意の両様がみえる。当該歌では後者の意。

④おられぬ花そうつろひぬへき―前記本歌を踏まえ、実際には手折られない高嶺の花が色あせていく様に仕立てている。

⑤とりなされて―あるものを変えて他のものに仕立てるのが原義。ここでは本歌を上手く踏まえて一首を仕立てていることを指す。『千五百番歌合』の慈円詠「わがなみだよしののかはのよしさらば

いもせの山のなかにながれよ」（恋三・千三百二十三番左・二六四四）について、「左歌は、ながれてはいもせの山の中におつるよしのの河のよしや世の中、と侍る歌、おほかたのいもせのなからひのありやうをよめる歌にて、古今の恋歌のはてにはいりて侍ると見ゆるを、をかしくとりなされても侍るかな」とするのがその一例。

【通釈】

廿一番

左（歌）　兵部卿（源）有教

（花を）探し求めて（山に）分け入り花から（さらに奥に咲いている）花へと（心を留めて移動しながら過ごしているうちに意外にも）幾日も経ち、山路のはてに（行き着くまでに）幾晩も泊まってしまったよ。

右（歌）　勝　弁内侍

心ばかりが行きつ戻りつしていて、（実際には、）山が高いので手折られない花は、きっと（そのまま）色あせて（散って）しまうことだろう。

〔判詞〕（左歌の）「花より花に日数へて」は、風体や表現が望ましいさまではございません上に、「山ちのすゑ」（と詠んだ下の句辺り）も（山路の果てで日数を過ごしたのか、山路の果てに辿り着くまでに日数を過ごしたのか）はっきりしません。（右歌は）「心の行きて」という（古今集歌）を、上手に採り入れて変化させておりますので、「おられぬ花」（と詠んだ右歌）に（判者の）心が惹かれました。また右（歌）を以て勝とする。

十六

〈二十二番〉

廿二番

左（イ持）　右近中将師継

①よしの山麓の里の春②をへてひと日も桜③めかれやはする

右　雅忠朝臣（ロ）

④泊せ山⑤咲そふ花の色みえてことしはふかきみねのしら雲

左の吉野山は、ふもとのさとの春をへてひと日も（ハ）めかれせぬといひ、（ニ）右泊せ山は、咲そふ花の（ホ）色みえてことしはふかしと思へり（ヘ）知かたく侍れは、此番勝負不弁侍るへし、

【校異】

イ　持－ナシ（書）　ロ　雅忠朝臣－名本ニ無之可改（支）　ハ　めかれせぬ－さくらめかれせぬ（聚）、めかれす（書）（永）　ニ　右－右の（書）（永）　ホ　色みえて－色をみて（書）（聚）（永）（内）、色みて（支）　ヘ　ナシ－その心いつれあさしふかしと（書）（永）

【他書所伝】〈左歌〉ナシ　〈右歌〉ナシ

【語釈】

①**よしの山麓の里**－山裾の里。「さくらばなさかりになれば芳野山ふもとのさとに旅ねをぞする」（『中宮亮重家朝臣家歌合』四番・八・

右京大夫）の如く、吉野山の麓の里で桜を心ゆくまで愛で春を過ごす数寄の心を表す。

②**春をへて**―幾年の春を経てという例は多いが、ひと春を過ごす意としては、「春をへて花ちらましやおく山のかぜをさくらの心とおもはば」（『千載和歌集』巻第二・春歌下・八六・藤原基俊）がみえる。但し、千載集の例では、「春をへで」とする説がある。

③**桜めかれやはする**―桜から目を離すことが出来ないという意。「かぜをいたみひびきのなだを通る日も嶺の桜にめかれやはする」（『林葉和歌集』第一・春歌・一六七）、「ときは木のたえ間ににほふ山桜まれなる色にめかれやはする」（『後鳥羽院御集』詠五百首和歌・春百首・六四五）等が先行例。

④**泊せ山**―初瀬山（はつせやま）。また、『万葉集』における「泊瀬山」表記を「とませのやま」とする訓み方も別称として通行していた。大和国の歌枕で現奈良県櫻井市初瀬町一帯。初瀬山と桜の取り合わせとしては、「はつせやまくもゐにはなのさきぬればあまのかはなみたつかとぞ見る」（『金葉和歌集』二度本・巻第一・春部・五一・大江匡房）、「はつせ山うつろふ花にはるくれてまがひし雲ぞ嶺にのこれる」（『新古今和歌集』巻第二・春歌下・一五七・藤原良経）、「はつせ山うつろはんとや桜花色かはりゆく峰の白雲」（『内裏百番歌合』二十番左・三九・藤原家隆）等が主な先行例。

⑤**咲そふ**―花が加わる意。先行例の一つ「としごとにさきそふやどのさくら花なほゆくすゑの春ぞゆかしき」（『金葉和歌集』二度本・巻第一・春部・三四・源雅兼）では、白河院、鳥羽院、待賢門院の白河殿花見御幸に事寄せて、院や帝の盛代を言祝いでいる。当該歌が、院が久仁親王（後深草）に譲位した翌年の出詠である点や下の句の「ことしはふかき」を勘案すれば、或いは一首全体に後嵯峨院政初発期への祝言が響いているか。

【通釈】

二十二番

左（歌）持　　右近中将（藤原）師継

吉野山の麓の里での春を過ごして、（桜が日に日に奥の方へと咲いていくので）一日として桜から目を離すことができようか、いやできない。

右（歌）　　（源）雅忠朝臣

初瀬山では今年のさくらが去年よりも花が咲き加わり色どりが美しく見えて、今年は（桜の色が照り映え）峰の白雲も去年より今年が一段と（美しさが）深いことよ。

〔判詞〕左（歌）の吉野山は、麓の里での春を過ごして一日たりとも桜から目を離すことができないと詠じ、右（歌の）初瀬山は、咲き並ぶ花が（美しく）見えて今年は特に（峯の白雲も一段と）深く思える。その（左右の）心のどちらが浅い深いかは識別しにくいですので、この番の勝負は決めがたいでしょう。

〈二十三番〉

廿三番　沙弥蓮性

左

尋きて今そしめゆふ玉たすき雲ゐる山の初桜花

右（勝）　下野

みよしのゝおくまて花に誘はれぬ帰らん道の枝折たにせて

左今そしめゆふたまたすきなといへる、ふるき詞をかけていひ知て侍れと、右山とあらはれさるに侍れと、枝折といへるに聞えて侍れは、今たつねくるより帰らん路の枝折たにせてといへるは、花にまかへる心猶ふかくやそめまして侍るへき、以右爲勝、

【校異】

イ 山－嶺（永）　**ロ** 花－哉（内）　**ハ** 勝－ナシ（書）（内）　**ニ** 帰－まつ（聚）（内）（支）　**ホ** 道－みね（内）（支）　**ヘ** て－ナシ（聚）　**ト** 侍れと－侍めれと（永）　**チ** 右山とあらはれさるに侍れと、枝折といへるに聞えて侍れは－ナシ（聚）　**リ** 山と－山そ（書）（永）（内）（支）　**ヌ** あらはれさるに－あらはれたく（書）（内）、あらはれたく（永）、あらはれて（支）　**ル** 侍れと－侍れとも（書）（永）　**ヲ** 枝折といへるに聞えて侍れは、今たつねくるより帰らん路の－ナシ（支）　**ワ** くる－きたる（書）（永）　**カ** より－よりは（書）（永）　**ヨ** 帰－待（聚）（内）　**タ** たに－ナシ（支）　**レ** まかへる－さそはるゝ（書）（永）　**ソ** ナシ－仍（書）（永）、心（内）

【他書所伝】

〈左歌〉

『万代和歌集』巻第一・春歌上・二〇五　正三位知家

十首御歌合に、山花を

たづねきていまぞしめゆふたまだすきくもゐるやまのはつざくらばな

『夫木和歌抄』巻第四・春部四・花・一〇七二　正三位知家卿

十首歌合に、山花を、万代

尋ねきて今ぞしめゆふ玉だすき雲ゐる山の初ざくら花

〈右歌〉

『新後撰和歌集』巻第二・春歌下・九五　後鳥羽院下野

（宝治元年、十首歌合に、山花）

みよし野のおくまで花にさそはれぬかへらん道のしをりだにせで

『蓮性陳状』一〇　下野

みよしのゝ奥まて花に誘はれぬ帰らん道のしをりたにせて

【語釈】

①**しめゆふ**－しめ縄を結いめぐらし自分の所有であることを宣言する行為。「うゑたてて君がしめゆふ花なれば玉と見えてやつゆもおくらん」（『後撰和歌集』巻第六・秋中・二八〇・伊勢）等が先行例。

②玉たすき―襷の美称が原義。ここでは「おもひあまりいともすべなみ玉だすき雲ゐる山にわれしめむすぶ」（『古今和歌六帖』第五・三二一九、原歌は『万葉集』一三三九）と同様の用い方。

③枝折―木の枝を折って道しるべとすること。「花ゆゑにしらぬ山路のあらばこそいるさかへさのしをりをもせめ」（『月詣和歌集』巻第二・二月・一一四・源有房）、「よしの山こぞのしをりのみちかへてまだ見ぬかたの花をたづねん」（『新古今和歌集』巻第一・春歌上・八六・西行）等の例がみえる。

④ふるき詞をかけて―「今そしめゆふ玉たすき」辺りの表現に【語釈】②既出『古今和歌六帖』歌との表現の似通いを指摘したもの。

⑤右山とあらはれさるに侍れと、枝折といへるに聞えて侍れは―為家は、右歌は「山」と詠み込まれていないが、「枝折」に山の意が響いていると指摘する。定家詠「（山家）しばのとの跡みゆばかりしをりせよわすれぬ人はかりにもぞとふ」（『正治初度百首』下・一三九二）は、その例。これに対して『蓮性陳状』は、俊成詠「しをりするならのは柴にちる露のはらはらとこそねはなかれけれ」（『長秋詠藻』上・一四七）に山の意が響いていないことや、『古今和歌六帖』において「枝折」が木の部に入っている点等を指摘し、為家の判に異議を申し立てている。

【通釈】

二十三番　　沙弥蓮性

左（歌）

（探し）求めてきて（やっと出会い）（私は占有する為に）今こそしめを結おう、雲がかかる（高い）山の初桜花よ。

右（歌）勝　　下野

吉野の随分奥まで花に誘われてきてしまった。帰途の枝折もしないままに…

〔判詞〕左（歌の）「今そしめゆふ玉たすき」などという、（万葉歌のような）古い詞に関係付けて詞の使い方を心得ていますが、右（歌は）「山」と表現されていませんが、「枝折」と詠じたことで（山の意）が聞こえますので、今尋ね来る（というよりは）「帰らん道の枝折りたにせて」という（表現）は、花の中にまじってしまう（花に魅入られる）心が一層深く反映しています。右（歌）を以て勝とする。

〈二十四番〉

廿四番　　為氏朝臣

左（イ勝）

ロ みよしのゝ花は昔の春なからなと故郷①の山となりけん

右　　少将内侍

心をは染さらましを桜花山②のかひなくうつろはんとや

左上句春なからといへるまで珍らしき所侍らぬにや、下句もあまりにたしかに侍るか、右そめさらましをなといひてうつろはんとや侍る、少心覚束なくことたらぬやうに聞え侍れは、さりとては左勝侍るへし、

【校異】

イ 勝―ナシ（書）　**ロ** ナシ―新拾遺、春下、（聚）　**ハ** いへる―いつる（支）　**ニ** に―にそ（書）（永）　**ホ** 侍るか―侍へき（書）（永）、侍る（聚）（内）（支）　**ヘ** なと―と（書）（永）　**ト** とや―とやと（書）（永）

【他書所伝】

〈左歌〉

『新拾遺和歌集』巻第二・春歌下・一一八

宝治元年十首歌合に、山花　　前大納言為氏

みよしのの花はむかしの春ながらなどふる郷の山となりけん

〈右歌〉ナシ

【語釈】

①**故郷**―古跡が原義。ここでは、「（ならの京にまかれりける時にやどれりける所にてよめる）みよしのの山の白雪つもるらしふるさとさむくなりまさるなり」（『古今和歌集』巻第六・冬歌・三二五・坂上是則）の如く、かつて吉野川流域に営まれた離宮を指す。

②**山のかひなく**―「かひ」は、「峡」と「甲斐」の懸詞。「なげきをばこりのみつみてあしひきの山のかひなくなりぬべらなり」（『古今和歌集』巻第十九・雑体・一〇五七・よみ人しらず）等がその先行例。

③**春なからといへるまて珍らしき所侍らぬ**―著名な『伊勢物語』所収歌「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」に連なる詠と理解した上での発言。

④**あまりにたしかに侍る**―いわんとする事をあまりに直接的に表現し過ぎている意。例えば、俊成は「やましなのいはたのをのに秋くれて風に色あるははそはらかな」（『六百番歌合』秋部・柞・四四〇・藤原隆信）について「はじめ、やましなとおけるぞあまりにたしかにきこえたる」と、初句で地名をそのまま詠み込んでいる点を難じている。

【通釈】

二十四番

左（歌）勝　　（藤原）為氏朝臣

吉野山の（桜の）花は昔と同じ春の花でありながら、どうして旧都の山に（吉野山は）なったのだろう。

右（歌）　　少将内侍

桜花に心を染めなければ良かったものを。（その桜が咲く）山の峡の「峡」ではないけれど（その桜を大事に思う）「甲斐」もなく散ろうというのか、桜花よ。

〔判詞〕左（歌の）上の句は「春なから」というまで（特に）新味

がございませんでしょうか。下の句も余りにはっきり言い過ぎているでしょうか。右（歌は）「染さらましを」などといって「うつろはんとや」（と）あります（のは）、少し趣意がはっきりせず言葉が足りないように聞こえますので、それならば左（歌）が勝つでしょう。

〈二十五番〉

廿五番　　経朝朝臣
左
吉野山桜にまかふ色そなき峯の白雲名にはたてとも
右勝　　沙弥禅信
さくら花かはらぬ色を分かねて雲さへおしき春の山風
左哥人丸か目にはといへるいにしへの跡を捨て、
今の世にをよはぬこゝろをもて、更にまかふ色
なく思ひさため侍らん事こそ、なかれをくみて
源をわすれん心くちおしく侍れ、右春の山風
はかりにては題の心いかゝとみえ侍れ共、雲さへ
おしきといへる花を思ふ心ありて幽に侍れ
は、尤以右為勝、

【校異】
イ　勝―ナシ（書）　**ロ**　もて―もちて（書）（永）　**ハ**　更―桜（永）
ニ　くちおしく―口借（支）　**ホ**　は―ナシ（書）　**ヘ**　の―ナシ（永）
ト　と―とそ（書）（永）　**チ**　いへる―いへるは（書）（永）　**リ**　ありて―あまりて（永）　**ヌ**　幽―いう（書）、優（永）、かすか（聚）（内）　**ル**　侍れ―侍る（支）　**ヲ**　為―ナシ（支）

【他書所伝】
〈左歌〉ナシ
〈右歌〉
『現存和歌六帖』五八六
（さくら）　　源俊平
さくらばなかはらぬいろをわきかねてくもさへをしきはるのやま風
『秋風抄』下・雑歌・二七〇
院御歌合のうた　　源俊平
桜花かはらぬ色をわきかねて雲さへをしき春の山かぜ
『秋風和歌集』巻第十七・雑歌上・一〇七八
十首歌合に、山花を　　みなもとの俊平
さくら花かはらぬ色をわきかねて雲さへをしき春のやまかぜ

【語釈】
①人丸か目にはといへるいにしへの跡―『古今和歌集』仮名序「春のあしたよしのの山のさくらは人まろが心にはくもかとのみなむおぼえける」を踏まえた表現。桜を白雲と見紛うものとした和歌的伝統を指摘し、左歌が「桜にまかふ色そなき」と詠じた点を難じる。なお、『亀山殿五首歌合』では、真観が「古今序にも、（中略）吉野山のさくらは人丸が目にくもかとぞおぼえける」（廿一番・山紅葉）

と判を付している。

②なかれをくみて源をわすれん心－『摩訶止観』を出典とする語。『新古今和歌集』仮名序に「ながれをくみてみなもとをたづぬるゆゑに」とみえる他、『今鏡』序にも引用がみえる。

③幽に－内閣文庫本等では、「幽」の和訓「かすかに」とみえ、一方、永青文庫本では「優」字を宛てている。「幽」「優」では、意味合いが異なり、それぞれ「幽玄」「優美」といった意となる。当時の当て字はそれほど厳密なものではなかったと思われるが、ここでは底本の「幽」を尊重し、花を惜しむ心を奥深く表現した点を評価していると解釈した。

【通釈】

二十五番

左（歌）　（藤原）経朝朝臣

吉野山には桜と見まがうような美しい色など他にはないことよ。山頂の白雲が（桜と見まがってしまうものだと）評判になっているのだけれども。

右（歌）　勝　沙弥禅信

桜の花の変わらないように見える（雲の）色とを見分けることができない、雲までも（吹き散らされることが）惜しいことだと思わせる、春の山風よ。

〔判詞〕左歌「人丸か目には」と言っている従来の歌事蹟を顧みず、今の世で昔にはとても及ばない心をもって、さらに（桜と白雲を）みまがう色はないものと決めなさったことこそが、流れを汲んで源を忘れる（歌の伝統に立って、源流を忘れている）ような風情であって残念でございます。右（歌）「春の山風」という（表現）だけでは題の心としてどうかと思われますけれども、「雲さへおしき」と言う花を愛でる情緒があって幽玄でありますので、いかにも右（歌）を以て勝とする。

〈二十六番〉

廿六番

左（イ勝）　越前

①みよしの、花の盛に成ぬれは四方の草木も匂ふ春かせ

右　前権大納言為家

②（ロ）老の身にくるしき山のさかこえて何とよそなる花を待覧（ハ）

左山の心おほつかなくや、右くるしき山の坂こえて（ニ）

凡卑（ホ）のすかた、③たとへは妻木をへる山人の、なをしも花の陰をさりてよそにみえたる（ヘ）おもかけ、はなはたみくるしく侍るにこそ（ト）、尤可負（チ）、

【校異】

イ　勝－ナシ（書）　**ロ**　ナシ－新後撰、春下、（聚）　**ハ**　待覧－みるらん（書）（永）　**ニ**　ナシ－と（書）、といへる（永）　**ホ**　凡卑－凡早（内）　**ヘ**　みえたる－みたる（書）（永）　**ト**　みくるし

く侍るにこそ―見苦敷こそ侍れ（支）　**チ**　可負―為負（書）（永）、可曽（支）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『新後撰和歌集』巻第二・春歌下・九四

宝治元年、十首歌合に、山花　　前大納言為家

老の身にくるしき山のさかこえてなにとよそなる花をみるらん

『題林愚抄』第三・春部三・九九四

新後撰　　為家

老の身にくるしき山の坂こえて何とよそなる花をみるらん

【語釈】

①みよしのゝ花の盛に成ぬれは―吉野山の花盛りの春景を表す。表現に目新しさはなく、例えば『月詣和歌集』には「みよしののはなのさかりに成りぬればたたぬ時なき峰のしら雲」（巻第三・三月・一六五・藤原為業）と、上の句が一致する先行例がみえる。

②老の身にくるしき山のさかこえて―先行例として「老いぬればのぼる山路のくるしきに心をひくは桜なりけり」（『民部卿家歌合』四番右・八・二条院三河内侍）がみえる。

③たとへは妻木をへる山人の、なをしも花の陰をさりてよそにみえたるおもかけ―『古今和歌集』仮名序で大伴黒主の和歌の風体について「おほとものくろぬしはそのさまいやし、いはばたきぎおへる山びとの花のかげにやすめるがごとし」と評した表現を踏まえる。

【通釈】

二十六番

左（歌）　勝　　越前

吉野の花が盛りになったので、四方の草木も匂い立つ春風（が吹いていること）よ。

右（歌）　　前権中納言（藤原）為家

（こんな）老いの身で苦しい山の坂を越えてまで、どうして自分とは関係ないような花を眺めているのであろうか。

〔判詞〕左（歌は）山の心があまり表に出ていないのではないか。右（歌は）「くるしき山のさかこえて」（という表現は）凡庸で下品な様（である）。例えば（『古今和歌集』序のように）妻木を背負った山人が、（花の蔭で休むだけでなく）その上花の蔭を離れて他の場所で見える（ような風体であるのは）、甚だ見苦しゅうございます。当然負とするのが良い。

Explanatory Notes of *IN NO ON UTAAWASE* in 1247 — Twentysix Poems under the Title of *SANNKA*

Kunio ITOH and Yoshikazu FUJIKAWA

'Hohji-gannen Innno On-utaawase' was a petical event which was held in 1247 by the retired emperor GOSAGA. A total of twentysix poets participated in the event and under ten poetical titles including 'SANNKA-flower of mountain' two hundred sixty poems were made. These poems were combined as a couple and were judged a victory or defeat by FUJIWARA TAMEIE. In this article we tried to appreciate twentysix poets, 13 sets, having 'SANNKA' title.